



“市場”と“国家”を超越する「コモンズ」の創出

都市コモンズを生きる

【連載①】
齊藤日出治
(大阪労働学校・アソシエ学長)

【編集部より】西生ゴの労働裁判で、労働側の完全無罪という画期的な判決が出た(2月26日、京都地裁における京都3事件の判決)。わたしたちはこの判決を労働運動の勝利として受け止めるだけではない。都市資本主義の社会形成に向けた道を拓く社会闘争の活路として受け止める必要がある。関西でゴ、ポスト資本主義の社会運動に向けたものがつつて労働者、経営者が協議する社会を創造し、都市をモンスズを創造していく闘いである。それは、市場と国家の外に社会「モンスズ」を創出しようとする闘いであり、そこにはポスト資本主義の社会像が具体的に息づいている。労働運動を都市モンスズの創造運動として位置づける論考をここに紹介して、ポスト資本主義に向けた社会変革の構想をめぐる議論を深化させていく契機としたい。今号より3回に分けて、その論考をお伝えする。※注1本稿は「季報唯物論研究」第170号(2025年2月)「モンスズの理論と実践」特集に掲載されたものからの転載である。

1. コミュニティ・ケアとしての労働運動―階級闘争の都市的次元の出現

はじめに

市民的交₁通形態(市民社会)から
都市の生₂政治的交₃通形態へ

都市は近代世界の新たな地平を開示する。

政治の次元を浮上させるようになった。ひとびとの協働と連帯の組織化が、物

H・ルフェヴル（1901—1991年）「1968—1970」は、半世紀以上も前に、都市論の諸研究において、市民社会と政治的国家によって存立する近代世界のうちにこの両者を還元しなさい、都市という独自の位相があることを検出した。

この協同と連帯は、市場という物象の社会的運働の深さにある政治的次元を明らかにし出し、そのあるで交通と生産の組織化という課題を提示する。

二世紀のこんちや。この都市という相は、市民社会と国家の組織化および資本主義の動態の展開の重要な舞台となると同時に、その深層にある生命の網の目のつながりとそのつながりを組織する

本稿は、都市の生政治的次元における協同と連帯の組織化のうちに二世紀賢者達が組み立てていった破局的危機への活路を見出すとする一試論である。

工場占拠から都市反乱へ

階級闘争とは、剰余価値の
 するようになった。

労働と領有をめぐる資本と生産との闘争である。剰余価値は資本の循環運動を通して反復的に再生産されるから、直接的生産過程だけでなく、資本の流通過程や消費過程においても階級闘争は展開される。

この消費方式主義は、労働者の消費方式を資本の蓄積過程に統制し、労働者の購買力が増大を資本蓄積の重要な契機とするようになったのである。

郊外市街の建設、上下水道や道路や公共交通網などのインフラ整備は、二〇三年にイラク戦争を契機とした世界の諸都市で連綿的に発生した反戦集約のうねりに沿う。

二〇世紀以降、階級闘争は直接生産過程を越えて、その都市の次元を固有の舞台と社会生活の基盤整備、都市型生活様式の定着とともに、階級闘争の主戦場は、直接生産の反乱へと引き継がれる。

二〇〇五年を頂点とする。

化を請け負った米国の大手企業による水料金の大幅引き上げに憤ったコチヤパン人民衆の水戦争、スペイン・バルセロナの広場占拠に端を発する「ユニシバリズム」や社会的連帯経済の運動の高揚、中東のミラフの春の都市民衆蜂起など、それぞれが、

か、彼れらによる者への反動。この様態は過程を資本主義蓄積・価値増殖の空気に包み摂ひよとする都市政治・抗へて、労働をめぐむ都市住民が都市を自己統治する意識団体の権利主張を資本主義的権利にはばならない。だからD・ハウエイのO・Zとは言う。『資本主義闘争は、労働工程内部の綱

資本の蓄積過程は、資本による都市空間の組織化を決定する契機としている。

銀行や開発業者が土地を買収し、不動産の投機的取引によって都市開発を推進するだけではない。むしろ、開墾されなければならない。それは、労働過程を越えて、都市生活の次元全面展開されなければならない。

四四

コミュニティをケアする労働運動

そして、この都市的次元における反資本主義的闘争の高揚が、労働と労働運動の新しい社会生活を生産し再生し、河川・海洋・大地を管理し、保全する労働であり、都市住民の社会生活を生産し再生

たな地平を浮かび上げらせる。都市労働者の労働は、産業部門間のネットワークによって編成される社会的総資本の生産活動であるだけでなく、都市住民の社会的生産を組織する活動であり、都市住民の社会的生のネットワークを生産する活動であることがあわなる。それは、水・大気・森林・生産の労働妊娠、出産・子育て教育、介護、医療、福祉文化、芸術、科学的な諸実践であり、さらには自然や民間と関わる精神的な営みであらう。ひびびき生態系のおかげらにおいて相互に結合する関係の創造である。労働者の労働は、剰余価値の生産および資本蓄積活動であつただけでなく、賃料を生産する深層にある自然物

質代謝や生命体の生命活動であることが反資本主義的闘争の高揚を通して浮き彫りにされていく。

「労働」の概念は、労働の工業的形態に結びつけられた狭い定義から、ますます都市化する日常生活の生産と再生に関わる活動という性格を強調されていく。

労働者を「日常生活の再生産」に寄与するすべての者と定義し、ケア提供者、教師、下水道と地下鉄の修理工、配管工と電気工、足場組立工とトラック作業員、病院労働者の運転手、レストラン労働者と娯楽産業従事者、銀行員と市職員（D・ハウェイ「2012」三三頁）といった労働概念へとシフトしなければならぬ」（同書三九頁）。

感染症の世界的流行で明らかになったこと、それは食料を生じし連搬し調理する労働、乳幼児や高齢者を介護する労働、医療・福祉・公衆衛生労働こそが社会的生の再生産にとって基幹的な労働だということであり、その管理する道局の労働も配水管のパイプを製造する労働も、食料を生産し、運搬し調理する労働も、すべて「都市生活の生産と再生産に関わっている集団の労働」（同書三〇〇頁）として相互に結びついていることを指摘する。

つまり、労働者の労働は

労働者を明示的に列挙する。これらの労働は、賃金労働と非賃金労働、正規労働と非正規労働、物的生産労働とサービス労働、肉体労働と精神労働といった区別を越えて、都市住民の生活のネットワークにおいてたがいに結びあっている労働である。都市の社会生活を再生産する労働を担う労働者が連綿とつづいてきたことは、この基本的な労働が低賃金で過酷な条件で行われ、ないがしろにされているということであった。

同時に、これらの労働を担うのは、女性、人種的マイリテイク、移住民の社会的弱者であり、それは労働者の経済的搾取（エクスプロイトメント）と人種差別と階層化が絡み合っていることが浮き彫りである。

企業の利潤追求の労働であり、社会的総資本の部間間関係、社会剰余価値を杜絶する関係を剰余を生産する営みであるだけでなく、都市生活過程を包括的に管理する労働の営みであり、「コミュニティ・ケア」（佐々木秀彦、2024、二〇四頁）の労働であるという側面がせり出している。

市に生ずる住民の集団
 の活動は、労働運動へ
 の包括的ケアの活動となる。

労働が地域コミュニティ
 の包摂的ケアの活動となる。

それゆえ、階級闘争と労働
 運動の課題は、生産現場にお
 ける賃金や労働諸条件の改
 善の取り組みであるだけ
 でなく、それ以上に都市のコ
 ミュニティを保全し、ジェン
 ダー差別や人種差別を廃棄
 する取り組みであることが
 明らかになる。
 労働運動および階級闘争
 は、都市に住まう住民の集
 団の権利を主張する闘争、これ
 が階級闘争であり、労働運動
 とする。
 ハウエイは、かつて資本
 主義の産業の生産と結びつ
 いていた労働運動がこの制
 約を越えて都市の社会的制
 度の生産を担う労働運動へと
 変換したことに注目する。

O'Neil(二〇一頁)の運動とは

社会的ユニオニズムの運動へ

社会的・ユニオニズムの運動は、狭義の労働運動を越えた広範で多様なコミュニティ・ケアの運動と絡み合う。

たゞは、地域の文化活動
がそうである。

佐々木孝彦「2024」は、
地域の文化施設（博物館、図
書館、公民館、劇場、ホール）な
る。

それは、地域住民の世代や
分野を超えた繋がりを創造
し維持する持続可能性の活
動であり、「コミュニティ・ケ

アの実践である。だから、文化 commons の創造と維持は、社会的ユニオニズムの運動として再定義されるべきであらう。

０７）は「労働の領域がますます生の諸形態の領域になつたのである」（同書二〇三頁）という認識を立て、社会運動と労働運動との連携の必要性を訴へている。このようにして、労働運動も、階級闘争も、都市コミュニティのケアを担う集団的な権利の闘争となる。そこに、これらにおける労働運動と階級闘争がはらむ固有の都市的次元がたち現れてくる。

するとこの意義については、古典思想においてはすでに洞察されているのである。たとえば、ジュールドンの所有（ここでは、フルードンの思想）については、ジュールダン（J・D 2023）が興味深

い。これらうち、この生産活動がはらむ全社会的な社会的事象としての意義が、都市的次元において鮮明に浮かび上がり、その当事者自身によって集団的に意識されるようになっている。

関西生コンの労働運動・再考

一九六〇年代から半世紀以上にわたって取り組まれ、確保しようとする。

動をこのコミュニティ・ケアの視座から定位しなおす必要がある（この労働運動の意義と二〇一八年以降の大弾圧の意味については拙著に、関西生コンの労働運動を、関西生コンが、都市生活の保全に寄与するような生コンの品質管理、安全で良質な生コン製造を監視するコンプライアンス活動に積極的に取り組む。

論「企業別責任主義と主権力」(『近畿大学日本文化研究所紀要』第6号、二〇〇二年を参照されたい)。

関田生三(芳紀)は、個人加盟の産別労組として、個別企

また、耐久性・水質保全性のあるコンクリートを開発する技術研究にも取り組む行政と連携しながら都市の環境保全・安全管理にもかかわる。

業を越える企業横断的な統一の労働条件・賃金条件の闘争を展開する(同時に、生コン産業の経営者を事業協同組合に組織し、その事業協

その意味で、この労働運動は、都市への集団的権利を唱える都市型労働運動として再評価する必要がある。この運動はこの国の労働運動と

同組合が仕入れるセメント
価格、製造したセメントの販売
価格を大手のセメント企業・
ゼネコン企業と協議して取り
決め、弱い立場の生コン業

参考文献／ハーウェイD「2012」『反乱する都市』森田成也ほか訳、作品社「2020」『反資本主義』大塚定晴監訳、作品社／ネクリA・ハートM「2009」『コンヴェルズ』水嶋一藍監訳、NHK出版「2011」『アセンブリ』水嶋一藍ほか訳、岩波

書店／佐々木秀彦「2024」『『文化的』「モンス」みずす書房／
シュールダンE「2023」『ブルード』伊多波宗周訳、白水社



都市コモンズを守れ!—2000年4月・ボリビア
第3の都市コチャバンパ。非人道的水道料金
上げに対し、市民が勝利したボリビア水戦争。

参考文献／ハーヴェイD「2012」『反乱する都市』森田成也ほ

が訴、作品社「2020」「反資本主義」大屋定晴監訳、作品社／

ネクリ A・ハート M「2009」『ゴモンウェルス』水嶋一憲監

訴 NHK出版「2017『アセンブリ』水嶋一憲ほか訴、岩波

書店／佐々木秀彦「2024」『文化的「モンス」』みすず書房／

シニールタム「2023」ニールトの伊多派宗唐詩 白才社



「市場」と「国家」を超越する「コモンズ」の創出

都市コモンズを生きたる【連載②】

齊藤日出治
(大阪労働学校アソシエ学長)

「編集部より」人びとの共的な生活圏までをも開き込み収奪しようとする市場原理主義者と対峙する闘いで「労働主体による都市形成へのコミットメント」である、と唱える筆者の論述に共感の音が届いている。筆者は、都市形成に関わる諸問題を中小経営層と共に「産業政策運動」として展開し取り組んできた関西生コンの労働運動こそ、そのような都市コモンズ形成の先駆的な闘いだと断言する。その貴重な運動をテコにして、今号ではさらに「都市コモンズ創造への道筋を求めて」論考は続く。

2. 都市コモンズの生産をめぐる社会闘争 — 生政治的生産と新しい階級闘争。略奪による蓄積

資本蓄積とは、私的所有の運動であり、私的所有の社会関係の拡大再生産である。

資本蓄積を推進するため、共有地を囲い込んだり、共有財産を私有化する多様な方法が駆使される。この方法は、資本の本源的蓄積過程で資本制生産の前提として展開されるだけでなく、資本蓄積の日の進捗過程で日常的に展開される。

生政治的生産 — 工場の外部に出現する「共」

だが資本蓄積の進展は、そのような共有財産の囲い込みとは別に、資本蓄積過程がみずから二つの協働の関係を促し、コモンズの発展をたえず誘発する。そしてこのコモンズが生産過程は、ここに工場や企業の空間を越えて都市の全領域に広がり、資本の制動力からしだいに自律するようになる。この動きは、そのようにして資本から自律して発展

会い、生活をともにして、協働して生きる。その暮らしそのものが共を生産する活動となる。

ネグリ・ハートMはこの活動を「生政治的生産」と呼ぶ。生産活動の中心が物質的なものよりも、「イメージ、情報、知識、情動、コード」社会関係など「非物質的なもの」に移動し、物質的なものはむしろそれらの「非物質的な活動」に依存するようになる（同書上二二八頁）。

この非物質的な活動は、都市の日常生活における住民の交通・コミュニケーションを通して展開される。資本による剰余価値を生産は、かつて労働者を工場に囲い込んで協同労働を指揮し、その成果を私的に所有したが、いまや資本の外で資本から自律して行われ、資本は生政治に直

都市住民の開かれた協働

— 「都市的なものの優越」

この統治実践の新しい地平が、階級闘争の新たな地平と新たな社会的主体を浮上させる。それは、市民的交通形態

は、資本によるコモンズの囲い込みと労働者の協働の成果の私的占有という次元を超えて、資本の制動力から自律した人々の協働を自己展開させるからである。コモンズは、資本が囲い込む協働であるだけでなく、資本の外において人びとが自律して協働する活動として日々生産され再生産される。

資本制生産の発展は、資本の制動力を越えて人びとの生命活動の協働関係を自己展開させる。半世紀以上も前にこの動態を察知していた都市論の思想家がいる。

H・ルフェーヴルがそのひびである。ルフェーヴルは、一九六〇年代に精力的に執筆した『都市革命論』において、ネグリ・ハートが着目した資本から自立し資本を制御する「共」の生産活動の展開を都市の過程のうちに先取りするかにちて洞察している。当時のルフェーヴルは、この社会的対象を「工業的なもの」に対する「都市的なもの」の優越、と呼んでいる。

資本の循環運動を通して不釣り合いに価値を増殖する資本の蓄積は、その運動に適合して都市空間を編成する。労働者住宅街と富裕層の高級住宅街、ガス・電力、上下水道・鉄道・自動車道、労働者の生活の基盤整備、労働者の大衆消費を条件づけるショッピング施設・飲食街、学校、大学、研究所などが建造される。この資本蓄積過程の進展を通して、都市に集住するおびたしい数の見知らぬ住民が出会い、その出会いが多様な社会的諸関係を創出するようになる。

この新しい階級闘争の対抗的政治は、経済学の言説次元でも展開される。都市に噴出するおびたしい社会的活動を私的所有と政治的国家を超えて都市住民の共同管理にゆだねることは非現実的であり不可能である、という言説が経済学では支配的となる。

米国の生態学者キャレン・ハートマンによる「共有地の悲劇」(一九六八年に『Science』100巻3859号に掲載された)はその代表的言説である。

ハートマンは、私的所有されている畜産を共有地に開放すると、畜産の所有者が競って放牧する羊を増やそうとするから、牧草が食い尽くされ、共有地が持続不可能となると主張し、これを「共有地の悲劇」と呼ぶ。

これに対して、E・オーストロン『コモンズのガバナンス』は、ハートマンに反論する。放牧地、農地、漁場、山林を共有する当事者がたがいが、ある意味で富裕層という限られた集団のコモンズであり、「貧困層は、自分たちの排他的な都市空間をあたかも伝統的な村落共有地であるかのように売り込むほど厚かましさをもちあわせている」(同書二二八頁と皮肉をこめて)。(「コモンズをめぐる経済学の言説」の項、次頁)

2017年暴風被害で3000人以上が死亡したブルトリコ一強欲資本主義による植民地主義的改造が進められた



「貧者のマルチチュード」は拡大して、出合いの回路を通して「共」の資源を絶えず発見し、創出する戦略で、生き延びるための戦術を編み出し、社会的生の形態を生産しているのだ(ネグリ・ハートM『2000下九二頁』)。

参考文献：ルフェーヴルH『1968』『都市への権利』森本和夫訳、晶文社、1970年。『都市革命論』今井成義訳、晶文社、齊藤日出治『2008』『都市的なものの優越』H・ルフェーヴル『都市革命論』『社会・経済学』4。都市の世襲。世界思想社、所収「ルフェーヴルM『2004』『生政治的生産』」『コージュ・フ』1978。79年講義。『現代思想』2。筑波大学。ネグリ・ハートM『2000』『コモンズ』水嶋、監訳、NHK出版『2017』『アセンブリ』水嶋、監訳、岩波書店。

「コモンズ」をめぐる経済学の言説

都市コモンズを生きる

【連載③】 齊藤日出治
(大阪労働学校アソシエ学長)

「市場」と「国家」を超越する「コモンズ」の創出

※前号より続き

これに対して、これら都市において立ち現れている無数のコモンズは外に開かれていく。

生政治的生産において立ち現れているのは、外に開かれたひとびとの協働として組織される「まちで

3. 都市コモンズを生きる個体

都市の住民が日常生活の営みにおいて直接「共」を生産し協働する営みにおいて、人びとは協働を追求するためにも、共を自己の内部にとりこみ、共を基盤として自己形成を遂げる必要に迫られる。

労働力商品を販売する労働者は、自己の身体はらむ精神的・肉体的な能力をできるかぎり高めようとする。そのために、賃金労働者は、企業家と同様に、自己の身体にできるかぎりの投資をしてその価値を増強を図る。

高等教育機関や技術研究機関を利用し、卒業後も生涯教育を追求して、自己啓発に努める労働者の身体はそれ自身が資本にはかならないという「人的資本論」が、このような労働

ある。遺伝情報や諸種の文化的コモンズやデータベースから言語・音楽・社会の諸慣行にいたるまで万人に開かれた共有資源が、日常的に人びとの協働を通して生産され、蓄理されている。協働が外に開かれていくからこそ、自由に自立した社会的生の形態が豊かに開花する。

「資本主義経済の内外で、生産的な社会的協働の開かれた拡張的なネットワーク」が組織され、そのネットワークが「自由かつ

自律的な生の諸形態を生み出すための強力な土台（スクリ・A・ハートM2「OJ」九四頁）となって、社会的生の営みの新たな地平がかなりなく切り開かれていく。

ここにちのマルチチュードの課題は、この開かれたグローバル・コモンズを資本による捕獲から逃れていくに共同統治するかにある。マルチチュードという社会的主体の生成は、この開かれたコモンズの共同統治の実現いかんにかかっている。

そのような都市論を踏まえて、フロダは、自分の居住地を選択することが人生を幸せに送るための決定的な要素だと提言する。だが、労働者が自己の身体にふくまれる価値を高めるためには、個人的な自己の能力向上の努力に依存するだけでは不十分である。人的能力の向上のため

クリエイティブ都市を
私益の源泉として生きる個人

R・フロリダ「クリエイティブ都市論」(2008)は、都市の発展が人々の集合力によって培われる創造性に基盤を置くという都市論を説く書である。同時に、個人が幸福な人生を送るためにはそのようなクリエイティブ都市とかわるがかわるが条件だといつことを説い

都市コモンズを
育てる社会的個体

コモンズを私益の糧とするこのような生き方に、対して、資本の外部に開かれたかたちで生成する都市コモンズを人びとの共同統治に向けて生きる個体も出現する。それは、生政治的生産の動態を近代の市民的交通形態のうちに回収してしまう前者の動きと決別して、近代市民社会を生政治社会へと転換する道を行く。それは同時に、私的個体

西ヨーロッパで中高生の授業ポイントから高揚したとに触発されて、マイカーや飛行機による移動を制限するといった、自分たちの暮らし方を変えようとする運動から環境問題への取り組みをスタートさせた。

さらに、環境危機が地域・社会階層・世代ごとに不均等な影響をあたえることを知り、その見えない関係を見えるようにしようとする気候正義のNGOの運動に飛び込む。そしてこの取組みで知り合ったベルギー人のパートナーと移住し、移民として、子育てする女性として、暮らしつつ、そこで水産正義運動を担うトランスナショナル研究所のNGOスタッフとして働く。

二〇〇八年に住宅価格が急上昇するなかで高価な住宅をローンで購入して生計の債務収束になることに疑念を感じた岸本は、家賃の安いフリュッセルに引っ越し、在米しながらオンラインでNGOの業務を続ける。そこで、水道の再公有化の動きを追跡する。

都市コモンズを組織する
個人の対抗的な生き方

「クリエイティブ資本論」で語られる個人の生活は、都市住民の創造力が集積するメガ都市圏がコア・着意を發揮して起業家精神を豊かにする活動である。市場競争のために私利個人を生き抜くために起業家精神を最大限発揚

方正義コレクションが国立西洋美術館を生み出したように、文化的コモンズは個人の起業によって創造され発展する。

むすび

都市コモンズを生きる社会的個体は、私的所有のものでないコモンズにもとづく自立した強い個人ではもはやない。社会諸関係から分断され社会を喪失したむき出しの裸の個人に向かつて、社会的協働による生命活動のネットワークを豊かに張り巡らす。そのネットワークを基盤として自由で自立した社会的生のありようを無数に開花させることこそが、社会を再生させる。新たな社会的個体の出現を可能にする。

都市コモンズのうねりを担う個体としてはじめて安定した状況を手に入れることができる。と説く。



より自らを「都市コモンズ」の主人公たべく声を挙げ、遂には軍部クーデターを無血阻止した韓国民衆に学ぶ時

参考文献
岸本聡子「2025」『松つたんだもん民主主義』晶文社
フロダR「2008」『クリエイティブ都市論』井田典史訳、ダイヤモンド社
佐々木秀彦「2024」『受動的コモンズ』みすず書房
鈴木大祐「2024」『暴れる日本の公教育』集英社新書

(終)